博士論文

篆刻史観の展開を中心とした
西泠印社創始者の印学に関する研究

論文要旨

平成 29 年度

筑波大学大学院　人間総合科学研究科

博士後期課程　芸術専攻

正岡　知晃

筑波大学

本論文では、中国の清代末期から民国初期にかけて設立された西泠印社の創始者の印学を考察の対象とした。西泠印社は、金石の保存と印学の研究を目的とした美術社団であり、呉隠（1867-1922)、葉銘（1867-1948)、丁仁（1879-1949)、王禔（1880-1960）の四家が創始者である。この四家の協力により西泠印社は 1904 年に結社され、丁仁によって西湖の孤山に土地が供され、更に中国最後の文人と称される呉昌碩（1844-1927）を社長とすることで組織が固まった。

これまでの研究成果により、西泠印社の文化的地位や印学界への貢献は既に揺るぎない評価を得ている。だが西泠印社史はすでに百年を超え、印社に所属する社員は膨大となり、研究の手が及んでいない人物も数多くいるのが現状である。その中でも結社の原因となった創始者の 4 名については、その考察が作家としての側面からの研究に終始している感は否めず、彼らが抱いた印学への考え方や、その相互関連については考察の余地が残る。また当時の印論の研究においても数多くの印論が発掘されるようになったものの、その分析は、代表的な印論に限られており、特に西泠印社創始者の印論には検討が及んでいない。

そこで本論では、西泠印社の創設に携わった四家（丁仁・葉銘・呉隠・王禔）は、それぞれどのような印学観を持ち、その中でも特に篆刻史観はいかに展開したか、四家の印学観は近現代の印学史に於いていかなる位置を占めるのか、という点を主要な問題に据え解明に取り組んだ。　上記の問題を解決するため、本論文では六つの観点から、それぞれ一章を設け考察を進めた。

まず第一章では西泠印社創設以前の印学を取り巻く状況、創始者周辺の動向がどのようなものであったかという点である。ここでは当時の印譜や印論の刊行状況を精査し、特に創始者に影響を与えたと考えられる魏錫曾（？-1881）と丁丙（1832-1899）の印論に着目し、比較検討を行った。また、清代中期～末期の印論を比較検討し、当時の状況を整理した。更に、魏錫曾・丁丙については彼らが記した印論は勿論、編纂した印譜に載録される西泠諸家の年代的変化も検討した。

第二章では丁仁の編纂した印譜を網羅的に整理し、そこに附される序跋文に着目するとともに、彼の印学観及び篆刻史観を明らかにした。また彼自身が編纂した印譜に収められた印人の載録傾向の他にも、そこに記される彼の言説を考察対象とし、それを踏まえその分析を進めた。

第三章では葉銘編纂した印譜や篆刻関連書籍に注目した。特に彼が編纂した『再続印人伝』・『広印人伝』の小伝の分析と共に、自身が編纂した著述以外に見られる、彼の言説も広く検討・考察の対象とし印学観・篆刻史観を明らかにした。

第四章では王禔の編纂した印譜に注目すると共に、他の創始者と異なり、多くの実作を残し、自刻印譜を編纂しているため、その刻風と共に実作に附される側款を考察対象とし、彼の印学観・篆刻史観を明らかにした。

第五章では呉隠の印譜等の印学関連の書籍の他、他の創始者が重視してこなかった、金石関連の言説も視野に、彼の印学観及び篆刻史観を明らかにした。

第六章では創始者四名の篆刻史観及び印学観を比較検討し、更には清末から民国初期の印論の状況を検討し、創始者四名の考えが当時の印学観・篆刻史観の中でどう位置づけることができるのかを検討した。

以下に章ごとの考察結果について整理したい。

第一章では西泠印社設立以前の印学を考察した。ここでは清代に流行した二つの流派、浙派・皖派を巡る印論の状況や、それを取り巻く印人についての言及に着眼した。それらを見ると、各流派や印人が断片的・各個人限定的に述べられる状況にあった。この時期は印人の流派への帰属や西泠諸家の枠組みが未だ流動的であり、この枠組みが定型化していく過渡期であった。特に魏錫曾・丁丙の印論は特徴的であり、その後の創始者達の浙派・皖派論へ影響を与えることとなった。丁丙は西泠四家を浙派の中心と考えながらも新たな刻風を築いた人物として趙之琛・銭松を編入し、浙派衰退論を唱えた魏錫曽とは異なり、浙派刻風が発展の最中にあるという篆刻史観を抱いていたことを導いた。

第二章では丁仁の印学観、その中でも特に篆刻史観の考察を行った。丁仁の印論では浙派への言及が目立つ。これを見ると、丁仁の印学観はあくまで浙派を中心の柱として発展される考えを抱いていた。また篆刻史観においては西泠八家の後四家の発展と共に篆刻界への刻風の継承が広まったという篆刻史観を抱いていたことが窺えた。

もちろん丁仁は皖派への言及も見られたが、その中でも趙之謙を「浙派中に皖派を融する」と述べるように、あくまでも浙派が主流であるという立場であった。彼の印学観や篆刻史観形成の背景には、魏錫曾・丁丙の影響が垣間見られる。魏錫曾・丁丙の影響から西泠八家の枠組みを確定し、更に趙之謙を浙派中に皖派を融合した人物として位置づけた。更にその周辺の浙派印人の継承状況を『杭郡印輯』の小伝によって示したのである。また、丁仁は印学観を述べる際、常に篆刻の制作実践で大成した印人を念頭に置いており、篆刻理論や印学の体系にはあまり言及することはなかった。篆刻実践者として浙派を継承・発展させようとした丁仁の姿勢が本章から明らかとなった。

第三章では葉銘の印学観、その中でも特に篆刻史観の考察を行った。葉銘は金石学と印学の関連を意識しながらも、中心となるのは篆刻制作や表現面であると考えていた。また葉銘は印人伝の編纂が特筆されるが、そこでは広範に亘る印人の継承関係を示しつつも、中心となるのはやはり浙派であることが分かった。

葉銘の印人伝は『再続印人小伝』、『広印人伝』の両著に結実する。これにより明代から民国初期に至る広範な印人の継承関係を、直接的ではないが結果的に示すこととなる。彼の印人伝は、過去の印人伝と比較しても継承を表す文言を増補した様子が窺え、他の流派と比較した結果、浙派の継承関係を重視していることが判明した。

第四章では王禔の印学を考察した。王禔の印学観は篆刻制作を中心に据えながら、浙・皖派を中心として、金石刻画の影響を受け発展したとする考えを抱いていた。篆刻史観としては浙派では陳鴻寿・趙之琛、皖派では呉讓之・趙之謙に隆盛を見出し、円朱文印の淵源を元印に見ており、このことから漢代・元代そして清代の二大流派へと隆盛していくという篆刻

史観を抱いていたことが察せられた。

王禔は創始者の中でも、比較的多くの篆刻作品を残しており、これに刻された側款に特に注目しながらその篆刻史観を探った。王禔は浙・皖派広くその刻風を学び、これと同調するように、自蔵印譜においても両流派の作品を偏ることなく載録している。

また印学を書画と並び芸文と並ぶ分野であるという考えを持っていたことが彼の『西泠印社志稿』等の言説から窺えた。印学を書画に付随する小技とされる従来の考えとは異なり、改めて印学の地位を高める指摘であったと言える。

第五章では呉隠の印学観・篆刻史観に着目した。呉隠は創始者の中でも最も出版活動に尽力し、多くの印論を残している。これを考察すると、呉隠は金石学を構成する諸領域が、印学の学問体系の構築に際しても一部を共有させることが必要であるという印学観を持っており、篆刻史観も浙派・皖派のみならず広範に亘る印人を包括的に捉えようとしていたことが判明した。

これまで知られていた呉隠の『遯盦集古印存初集』に加え、本論では新たにこの印譜以前に編纂された『遯盦蔵印』と、『初集』を増補した『遯盦集古印存』を発見し、その分析から呉隠の所蔵印の変化と、彼の篆刻史観の変化を明らかにした。当時の動向として浙・皖派二流派を中心とした篆刻史論が展開される傾向にあり、これを呉隠が取り入れたことが背景にあった。

また呉隠は金石学を構成する文字学・校勘学・目録学・伝記といった分野が、印学の学問体系の構築に際しても共有する必要があると考えていた。更に彼はこれを基礎としながらも選印・篆刻技法・篆刻史といった印学独自の分野を包括した体系を志向していたことが分かった。これは他の創始者には窺われない理念であり、その理念は印論叢書・金石叢書の編纂によって体現されるのである。

第六章では西泠印社創始者の考えの比較検討と、当時の時代背景から見た四家の位置付けについて考察した。四家の印学観は、篆刻の制作実践を中心に据えた丁仁・葉銘・王禔に対し、篆刻の理論面や金石学との関連を意識した呉隠とで違いがあった。四家は清代から民国初期の印学界を中心に考えたが、一方で同時代の羅振玉・黄賓虹は古璽印を中心に印学を捉えなおす活動に注力しており、近代と古代の二極から篆刻史を認識する活動といえる。その後篆刻史全体を考察する王光烈や馬衡の活動へと展開していく様子が明らかとなった。

各章の研究成果を踏まえ、本論では以下を結論とした。西泠印社創始者四家の印学観は、篆刻実践を中心と考えた丁仁・葉銘・王禔に対し、篆刻理論面や金石学との関連を意識した呉隠とで違いがあった。また篆刻史観は浙派を篆刻史の中心と考える丁仁・葉銘に対し、皖派や他流派も包括的に捉えた呉隠・王禔とで異なっており、印譜編纂や実作面での根本理念となった。四家は清代から民国初期の印学界を中心に考えたが、一方で同時代の羅振玉・黄賓虹は古璽印を中心に印学を捉えなおす活動に注力しており、近代と古代の二極から印学界を認識する活動といえる。その後印学史全体を考察する王光烈や馬衡の活動へと展開していくことを導いた。